

2014年9月3日

安富歩（東京大学 東洋文化研究所 教授）

本日は講演の機会を与えていただき、ありがとうございます。

私は普通は原稿を一切用意しないのですが、今回は、ふと、原稿を書いてみようと思いつきました。

私は、具体的な活動を苦手としています。ですから、何をどうしたらいいかを皆さんにお話することはできません。

私は、考えることが仕事です。ですから、何をどう考えたらいいのか、そのお手伝いになることをお話出来たら、と思います。

先の参議院選挙において、緑茶会は、残念ながらまったく機能しませんでした。量的には、完全な失敗だったと認めるべきだと思います。

しかし、「量」や「大きさ」に注目することは、まったくの間違いなのです。なぜなら、人間社会において、量や大きさは、急激な速度で変化するからです。たとえば人口を考えてください。人類の人口は、猛烈な速度で増えています。それは、マルサスの心配した「幾何級数的」というようなものではありません。「幾何級数の幾何級数」という速度で増えているのです。このままいくと、2050年ちょっと過ぎあたりに「発散」してしまいます。逆に、減り始めると同じく猛烈な速度で減っていきます。たとえば今の日本では、このまま推移すると、2040年には523の都市が消滅する、という推計が出て話題になっていました。

社会の基礎となる人口がこの有り様ですから、その上で形成されるすべての現象は、同じように幾何級数を上回る速度で変化する、と考えねばなりません。今現在、どんなに大きくとも、あるいは小さくとも、増減が始まれば、あっという間に劇的な変化が起きます。

では、この社会は何でできているのでしょうか。社会の要素は「人間だ」という考えは既に否定されているとあってよいでしょう。たとえばここにたくさんの独房があり、そこに一人一人、人間が閉じ込められている、としましょう。ここにどんなにたくさん人間がいるとしても、それは社会ではありません。つまり、人間を集めても社会にはならないのです。

ではどうなれば社会だと言えるのでしょうか。それは人々の間にコミュニケー

ショが生成されているなら、社会だと言えます。それゆえ、社会は「コミュニケーション」でできている、という考えが正しいのです。

この観点からすれば、社会にとって人間はコミュニケーションを産出する外部環境だ、ということになります。コミュニケーションがコミュニケーションを生み出し、その全体構造が再生産され続ける限り、そこに社会が「ある」といえるのです。(これはニクラス・ルーマンという社会学者の学説をもとにしています)

ではコミュニケーションとは何でしょうか。これは難しい問題ですが、それが「情報発信」でないことは確かです。なぜならいくら情報を発信しても、受け取る人がいなければ、何の意味もないからです。

コミュニケーションの成立にとって決定的に重要なのは、「意味を汲み取ること」だと言えましょう。特に、現代のようにヤタラメッタラ情報発信がなされている社会では、受け取り手がすべてを決定している、とさえいうことが出来ます。溢れかえっている情報の中から、誰かが何かを受け取り、意味を汲みとった瞬間に、コミュニケーションが生成するのです。(これはピーター・ドラッカーという経営学者の学説です)

つまり、社会変革を実現する上で決定的に重要な事は、「どのように情報を発信するか」ではなく、「情報の受け取り方の変化をどのように実現するか」ということなのです。人々の受け取り方が変わるとき、社会は劇的に変化します。これが「イノベーション」とよばれるものの本質です。

「新しい政党をつくる」というアプローチは、情報の発信の方に重点が置かれています。もちろん、それが人々の受け取り方の変化を引き起こすなら、社会変革につながります。しかし、現在のように情報の洪水が起きているような情勢で、情報発信によって変革を引き起こすのは、並大抵のことではありません。

私が緑茶会に注目したのは、これが日本でおそらくはじめての、政治空間における情報の受け取り手によるネットワーク生成の試みだからです。受け取り手の受け取り方が変わらない限り、コミュニケーションのパターンは変化しません。そこに新しい渦を作り出すことが、もっとも重要な戦略だと考えます。

私がかねてより「戦略的投票 (strategic voting)」と呼ばれるもの (戦術的投票 tactical voting ともいいます) の重要性を訴えてきました。私がイギリスにいたときに、保守党政権が崩壊し、労働党政権が成立しました。イギリ

スは完全に小選挙区制で、そこに保守党・自由民主党・労働党が鼎立しています。サッチャー時代は、この三つが競り合っていて、その結果、ちょっとだけ他を上回っていた保守党が、圧倒的多数を占めていました。選挙民はやがてこの現象から、戦略的投票をするようになったのです。それは何かというと、自分の好きな政党に投票するのではなく、自分の嫌な政党が敗北するように投票する、という投票行動です。人々がこの投票行動をとるようになり、保守党を嫌っている有権者が、自由民主党と労働党のどちらか勝ちそうな方に投票するようになったとき、保守党は地滑り的な大敗北を喫したのです。

試しにサッチャー時代の 1983 年と、ブレア政権の成立した 1997 年の総選挙を比べてみましょう。

1983	42.4%	397 / 650	Victory
	27.6%	209 / 650	Labour
	25%	23 / 650	SDP-Liberal Alliance
1997	30.7%	165 / 659	Conservative
	43.2%	419 / 659	Labour victory
	17%	46 / 659	Liberal Democrats

興味ふかいのは、1983 年の第三位の SDP-Liberal が 25%も取っているのにわずか 23 議席であるのに対して、1997 年はその両者が統合して成立した Liberal Democrats がわずか 17%の得票率で 46 議席も取っていることです。

1983 年の Labour + SDP-Liberal の合計得票率は 52.6% もあったのに、議席数はわずかに 232 議席でした。保守党は 42.4%で 397 議席も得ています。

1997 年はどうでしょうか。Labour + Lib-Dem の合計は 60.2%です。つまり 1983 年に比べてわずかに 7.6%しか増えていません。ところが合計議席数は、464 議席で、ちょうど二倍になっています。保守党は得票率を 11.7%減らしたただけだというのに、議席は 397 から 165 へと、232 議席も減らしたのです。

これは単に「小選挙区制の特徴」では済まない現象です。政党の側は、Labour と SPD-Liberal (Lib-Dem) に別れたままだったのですが、有権者の側が、自主的に両者を「保守党よりはマシ」と見做して、当選しそうな方に票を集中させたのです。

ちなみに現在の議席は次のようになっています。

2010	36.1%	306 / 650	Conservative
	29.1%	258 / 650	Labour
	23.0%	57 / 650	Liberal Democrat

労働党政権に国民が嫌気をさしていた上での選挙であり、Labour+LibDem の合計で 52.1%と、1983 年の Labour + SDP-Liberal の 52.6% よりも更に低かったのです。ところが合計議席数は 1983 年の 232 議席に対して、2010 年が 315 議席となっており、両者が協力すれば政権をつくることができたのでした。しかし国民がうんざりしていたのと、保守党がさすがに反省してさほど保守的でなくなっていたので、LibDem が保守党に協力して組閣しました。もし、国民の側が戦略的投票をしていなかったら、保守党が圧倒的多数を占めていたことでしょう。

そういうわけで私は、有権者による戦略的投票が、政治を変革する最善の方法だ、と主張しています。そして緑茶会の世話人となったのは、これを日本で少しでも実現するためでした。

しかし残念ながら、今のところ緑茶会は、その渦を引き起こすには至っておりませんでした。それは、単に大きさや量が少ない、というばかりではありません。私達は、肝心要の新しい受け取り方を生み出すことができていないのではないのでしょうか。

とはいえ、大きな成功も収めつつあります。そのひとつは、ゼロノミクマの出現です。このキャラクター戦術は、確かに意味を持っていると思います。しかしゼロノミクマだけで突破することはできないでしょう。

これから考えるべきことは、どうやってゼロノミクマを軸として、他の何かを接合して行って、自己増殖的な循環関係を生み出して、戦略的投票を日本の政治文化に根付かせるか、です。この新しいコミュニケーション戦略をどうやれば実現できるのか。本日は、この問題を皆さんと共に考えたいと思います。